

2021 年度国際ユース作文コンテスト

【若者の部】 佳作

「いのち」の意味

(原文)

西尾 敬太 (19 歳)

愛知県

私の心臓は、他人の心臓だ。

2015 年 5 月 13 日。私はアメリカで心臓移植手術を受けた。

特発性拡張型心筋症と診断された 2014 年の夏。元気な自分に戻りたい、そう思い続けながら、「痛いこと」、「苦しいこと」、「つらいこと」、「嫌なこと」、「しんどいこと」、全部我慢して乗り越えてきた。元の生活に戻りたい、その一心で。

診断された後、助かるには心臓移植しかない、と母は告げられた。

最初の緊急手術をしてから 1 週間、私は眠っていた。

目を覚ますと知らない天井、身体には点滴と体外式の人工心臓につながれていた。心臓に負荷がかかるから、という理由で体を起こすことはできず、水分制限もかかり、寝返りを打つことさえできなかった。

そんな生活から 3 か月経った。私はかろうじて生きていた。

体外式のものから植込み型の人工心臓に取り換える手術を行うことが決まった。

そのとき、はじめて移植の話を聞いた。

移植っていうのは人の死を待つんじゃない。

命のリレーなんだよ。

「人が死んでまで、自分は生きたくない」と移植医療を拒んでいた自分にかけてくれた主治医の言葉。忘れることのできない大切な言葉。

ドナーの方の命をつないで、自分とドナーの 2 人分の人生を背負って、毎日、悔いが残らないよう全力で生きよう、と決めた。

そして 2015 年 5 月 13 日。運命の日がやってきた。

これが最後の大きな手術。拡張型心筋症の闘病生活が終わる。

移植後は、免疫抑制するため、感染症などにかかりやすくなってしまふけれど、食べられないものも増えてしまふけれど、健康な人より制限はかかってしまふけれど、私はそれでもよかった。

家族と一緒に暮らせる、お風呂に入れる、学校に行ける。

今までは当たり前だったこと、そんな生活が戻ってくる。病名を告げられたあの日からずっと、目標にしてきたものがやっと達成される。些細な日常の生活、それはとても大きな希望だった。

そして心臓移植をしてから 6 年が経った現在、私は大学生。

将来の夢は臨床工学技士になって、小児の補助人工心臓治療に携わりたいと思っている。あの日の自分と同じような境遇に立たされた患者さんにご家族に寄り添った心のサポートもできるような、患者さんにも現場でも必要とされる臨床工学技士になりたい。

命とはこうである。と断言することはできないけれど、命あるものはすべて尽きる。

たった一度きりで、儚くて切ないもの。

自分の一生を振り返った際、色々あったけれど最高の人生だった、と思えるようになったとき、はじめて、脆くて儚い、たった一度きりの命はとても大きな意味を持つと思う。

今日も陽が昇る。

いつも通りの日々が始まる。

私は幸せを噛み締める。